



文久二壬戌

周防徳山

春後乃あきのふとやいねはる

麦園

斗進也く小田乃耕初

出島

莊園の内も梅き旅はる

築室

おまふ子よ母はあ川

取白

空を月も瘦る川の上

悟一

浮世乃隙をゆるる糖を

杏圃

瑞しと相識る色く糖進

如谷

多きちよるあつく

如竜

よこらる家あ乃川空文

可雲

大崎くも笑ふあし

可融

多るらる世界の中心を人傳

悟山

棧ワくも君ら瓜梨

悟雲

あやまら星の一帯も男よる

李香

老をゆるる教方は月

李田





高野の生さきうき山と願て 高行
 何天の幸と子の位家ある 高学
 宿引の乃志とある花曇り 文志
 神をぬりしる人おる 養二
 子存も物そまふもおとく 教月
 手越子生行 三 恥 法芝
 又く人の天志を法出 切秀
 能く言月業を如く市町 柳翠
 去夜を客入居草屋の向 倚山
 飯乃舎おきりきき毫 麦雲
 月もきの夜と出る夜と合 月
 あやま傘た山松茸 高
 兼高なる藤子屋ぬれ物の夜 高
 思ふのみまき思ふまき 高
 碑乃うんまうあう名おと 高
 山をまきして出あふ貝 高

高行 高学 文志 養二 教月 法芝 切秀 柳翠 倚山 麦雲 月 高 高 高 高

百位好きて難れの功を積 行
 長子乃不持んいもい 谷
 いら葉の奇よひたつ上戸 志
 何種ひく拙師の言 白
 きさう記乃む咲かぬ瀬戸の山 芝
 教多能白帆流ふお東風 秀

行 谷 志 白 芝 秀

見ふみよまふむあうち月 法芝
 多葉の苗植るや及乃梅の中 如谷
 世は法つる白ありきと曉の梅 悟山
 梅くや一工風ある言と結雲 悦書
 糸柳や月風は多ひく約を鞠 李杏
 馬のふるうちの裾ぬく柳うさ 教月
 足乃まお梅子屋く柳か 可雪
 中うくし隙の断るや直能む 李同
 所うく何良もそ 庭の障 松雲

法芝 如谷 悟山 悦書 李杏 教月 可雪 李同 松雲



ところの松ありとひら鬼刺 杏圃
 松くやむとくくある神のま 瓶白
 来の子も善法まや松乃家 悟一
 邦くも入え付町まを田押心 可陸
 谷川や松乃の下まあり陸 柳翠
 花と白くくむ夜傳一まの川 花秀
 花入も浮伝ありはる乃川 喜孝
 さきま入の中まむさく山葵心 春二
 松ためて居れと松一ま業松 志行
 との草まを松乃下まて松あり 如松
 胡葱やま乃下まう御みま 倚山
 松乃まてむも実まある松乃心 文志
 りくまも松乃松乃乃の松乃 麦室
 松乃まを松乃松乃乃の松乃 松乃

文久二壬戌

周防山口

我家乃佛ま一玉松ま 浮木

まのやくすうと松の十八 史圃

吉松平ん松くくお松 耕文

何まをある松の目移 芝扇

制れのあたまうる松の目 梅翠

乃松乃乃乃も松く世松 梅史

高まのふ念れ松のまはめて 文巴

はまのあまむく一まの松口 松五

木乃の松乃守ま松ま松古 木

人乃出せらるの松あり 圃

よの本まを不二松松と松松 文

風まをひまきまを松ま松 扇

丁乃の文ある松も松ま松 琴

松松まを松ま松松の月 史

満ちて瓜も西瓜も天竺奴
十人余より一押姓
長生乃笑眉之笑むむの裏
芥も藪も皆白髪を
園木五巴

きこつて梅も梅もあつた南谷
川上乃梅をよまや二月
多柳や風よ文あそ他の
汝風も梅さくまやまの梅
舟よ日をくしうまは
一もははて山乃笑顔
あじきおれ続てまは月
天花も空のゆきまの
木五扇巴史園架文

ま一ツにて実の入るまき
流るの松も久しき梅も
麦園
也高